

# 古高ドイツ語における „uuesan (sîn)+現在分詞“の用法

— Otfrid の場合 —

金子 哲 太

## 0. 序

現代ドイツ語では、現在分詞 (Partizip Präsens) は形態的に大部分の動詞では語尾に -end, また -eln, -ern で終わる動詞は -nd という形をとって造られる。その統語上の文法的機能としてはふつう、大きく分けて三つの用法を持っている。それは、1) 付加語的 (attributiv) 用法、2) 名詞的 (als Substantiv) 用法、3) 述語的 (prädikativ) 用法である。その用法の点で気がつくように、そしてまた更には意味の上でも動詞の表す事象の能動的な状態や性質を表すことから、現在分詞は形容詞化されたもの、あるいは形容詞に限りなく近いものと見做されることが多い。ところでこれらの用法のうち3)の述語的用法では、特にある程度限られた動詞から造られた現在分詞と sein 動詞とが結ばれて現れるという傾向がある<sup>1</sup>。

Das Mädchen ist reizend. / Die Sache ist dringend. / Die Nachricht ist sehr aufregend.

このような現在分詞の現れ方は、初学者には一見すると英語がそうであるように、sein + Part. Präs. という構造をとって現在進行形という文法形式を成しているという錯覚に陥りやすい。しかしながらそれは周知のごとく、ドイツ語の文法上の形式として確立されているわけではなく、たいの文法書では、前述のごとく形容詞化が進んだ 特別な動詞 (現在分

詞)として取り上げられているにすぎない。

ここで古い時代に遡ってみるに、同じ西ゲルマン語に由来する英語は、古英語の時代から現在進行形という文法構造を受け継いできている。同じようにドイツ語においても、その歴史のなかで現在に至るまでに衰退してしまったそれに近い構造が、以前には確認された。つまり古高ドイツ語の時代には、それは *uuesan(sîn)+Part. Präs.* という形をとって、単に継続や未完了を表すにとどまらず、現代ドイツ語のその用法よりはるかに広い範囲で姿を現していた。

本稿では、9世紀後半(863-871年頃)に古高ドイツ語で書かれた、「オットフリートの福音書」(*Otfrids Evangelienbuch*)を用いて、その形態的・意味的特徴(用法)を、この作品に大きな影響を及ぼしたラテン語版聖書との関係も含めて調査し、その傾向を探ってゆきたい。

## 1. 現在分詞について

分詞(*Partizip*)という術語は、もともとラテン語の名詞 *pars*「部分、一部」と、動詞 *capiō*「取る、受け取る」から造られた複合語である。つまり、「一部を受け取る、部分を受け持つ」といった意味であり、ここでは文法概念として、「動詞の性質と形容詞の性質を共有する」働きをしている。ところでパウル(Paul)が述べているように、「現在分詞の現在(*Präsens*)という表示は、ふつう形容詞がそうであるように、現在に関係するのではなく、文の定動詞が与えている時点に関係するので、的を得ているとは言えない」<sup>2</sup>のである。また過去分詞についても同様に、それは過去(*Präteritum*)という時制を表現するものではなく、本来的には完了相を表すものであって、主に現在完了、過去完了を構成することに使われたり、受動態をつくる要素であるので、むしろ完了分詞(*Partizip Perfekt*)と名付けた方がよさそうである。いずれにせよこの両方の分詞は、それぞれ無時制であり、それ自体で時制を表現することは不可能なのである。

古高ドイツ語における現在分詞の用法はすでに、現代ドイツ語におけるそれとその現れ方や頻度の差こそあれ、大体のところは同じ様相を呈している。ベハーゲル(*Behaghel*)は、今日までのドイツ語の文例を広く網

羅したその著書で、それを 1) 付加語的分詞 (das attributive Partizip) と 2) 述語的分詞 (das prädikative Partizip) という言い方をして分類している<sup>3</sup>。2) の分類では、かなりのページが割かれており、古い時代には述語的用法がよりさかんであったことを窺わせる。また一方でエールトマン (Erdmann) は、それを、1) 明らかに本動詞とは異なったいわば独立的な述語的用法、2) 本動詞と共に用いられて一つ概念へと融合された述語的用法、そして 3) 名詞的・形容詞的用法とに区分している<sup>4</sup>。ここでもやはり述語的用法が重視されており、とくに 2) の分類ではもはや彼は、現在分詞と本動詞 (ここでは、uuesan(sîn) 以外に faran, gangan 等の運動を表す動詞もある) を各々の成分として個別に扱わず、その両方でひとつの形式と見做しているようである。つまり特にこれから問題になる uuesan (sîn) > nhd. sein) に関して言うならば、uuesan(sîn) + Part. Präs. の構造を古高ドイツ語においてもほぼ迂言形 (periphrastische Form) として捉えていたといえる。しかし他方でこの構造は、主格として述語の機能を果たしている名詞的同格的現在分詞 (つまり主格という形をとって主語に関係する内容を表す = Prädikatsnomen として) と、本来存在・状態を表す動詞である uuesan (sîn) とが各々それ自体純粹にその役割を果たしているという捉え方も勿論できるわけである。つまり「～している人としてある、～しつつある。」(als~, wie~sein) といった同格を表す意味で捉えることができ、このように理解するほうが意味上しっくりゆくことも少なくない。いずれにせよ uuesan (sîn) + Part. Präs. という述語的用法は今述べたように、現代ドイツ語に比してはるかに大きな役割を演じていた。

ここでまず、uuesan (sîn) + Part. Präs. の用法のうち、その現在分詞が「動詞の性質と形容詞の性質を共有する」という点で、触れておくべき内容を含んだ例を二つ挙げておく。

1) *Ist ein thîn gisibba reves umberenta*, (I. 5, 59)

(汝の親類のうちのひとり、母体に関しては不妊である.)

2) *Nist boum nihein in uuorolti, nist er fruma beranti*,

suntar siu nan suente      inti fiur anauuente. (I. 23, 53f.)  
(もしそれ (=その木) が実を結ばないときは、それ (=斧) が切り倒さないような木、また火へと向けられないような木は、この世にはない。(=全ての木は切り倒され、火へと向けられる))

1) の例文では、現在分詞 *umberenta* は、動詞 *beran* (=産む) に接頭辞 *um-* (>*un-*) が結合しており<sup>5</sup>、主語 *thîn gisibba*<sup>6</sup> (=汝の親類) に合わせて屈折し、述語内容詞として主格の働きをしている。(形態に関しては、次項で詳しく説明する。) この場合「産む」というもともと起動的な意味が否定されているが、それは意味上「産まない」という人間界では現実的に不自然な事象を表しているのではなく、もともと「不妊である」といった性質・状態を表現していたといえる。この場合、代表的なオットフリート学者達のうちエールトマンのみが *uueseân (sîn)+Part. Präs.* の構造を説明する際、現在分詞としてこの箇所を挙げているが<sup>7</sup>、ケレ (*Kelle*) もピーパー (*Pieper*) もその『グロッサル』のなかでは、*umberanti* を形容詞として取り上げ、見出し語をつけている<sup>8</sup>。またこの箇所は、ラテン語の聖書では形容詞を用いて表されており、形態的に少なからず影響を受けているに違いない。...*quae vocâtur sterilis...* (Luk. 1, 36) (不妊である、と言われているその人 (=エリザベート) は)。

一方2) の例文では、内容的には同じように否定を表しているが *uuesan(sîn)* のほうに副詞の *ni-* が結合しており (*nist*)、*beranti* には影響が及ぼされていない。従って直訳したとしても、「産まない」 (=実を結ばない) という表現が成立し、「産む」という起動相の意味が依然明確であり、動詞的機能が強く保たれていると思われる。このような、動詞的機能と形容詞的機能とを分類することが比較的容易な箇所は他にはあまり見られず、この後順次挙げていく例文からも見て取れるように、判断が難しいところが多い。

なお「オットフリートの福音書」は、ゲルマン語の韻文作品がそれまでは頭韻 (*Alliteration*) という手段を用いていたのに対し、比較的大きな作品のうちでドイツ文学史上初めて脚韻を用いた作品である。ここで注意しなければならないことは、本稿で取り扱う *uuesan(sîn)+Part. Präs.*

の形態が、語末という環境で韻の制約を受けることである。つまりこのことから韻の都合によって（あるいはまた韻文作品という性格上、リズムが原因で）、本来その動詞が1語で表現しうるところを、単なる書き換え（Umschreibung）としてこの形式が用いられている可能性があるということ等を常に念頭に置いて、調査を進めなければならない。

## 2. uuesan(sîn)+Part. Präs. の形態

「オットフリートの福音書」は、第I巻～第V巻から構成されており、前後に献呈詩（文）が4篇付け加えられている<sup>9</sup>。（これらのうちの「リウトベルト宛ての献呈文」は、ラテン語で書かれており、ここでは問題にならない。）この中で uuesan (sîn)+Part. Präs. の構造が現れる頻度は、次のとおりである<sup>10</sup>。

Lud.	Sal.	I	II	III	IV	V	H. u. W.	計
1	0	74	3	8	5	6	1	98

この表から、第1巻に集中して用いられていることが判る。その理由としてエールトマンは、第1巻の執筆後にパウゼがあったからではないか、と述べている。一方でまた、ウルフィラがギリシャ語の完了時制をゴート語で表現する手段として、接頭辞 ga- を現在形と過去形に付加させることで完了的なニュアンスを生み出したように、オットフリートにもそのような工夫の跡が見られるところであるとも言える。実際、第1巻中のラテン語の聖書表現に対応する箇所では、現在形・未来形・現在完了を、当該の形式の現在形で、同じように未完了過去・現在完了・過去完了を、その過去形を用いて表現している。つまりこの形式を用いて、ラテン語の時制をドイツ語に取り入れようと試している、オットフリートの意気込みが現れていると言えるであろう。

ここに現れる現在分詞は、語尾が屈折する場合（flektiert）と非屈折の場合（unflektiert）がみられる。現在分詞が形容詞の機能に近いといわれる所以が、ここにも窺うことができる。また屈折している場合は、その語尾はすべて強変化である。しかしながら大半の場合は非屈折で現れ、屈折

している箇所は12例しか見られない<sup>11</sup>。これらの中で本来ならば当該の現在分詞は、その語尾については用法上、性・数・格において、当然主語のそれに一致すべきであるが (Subjekt-Beziehung 8例)、動詞 (現在分詞) の支配しているところの目的語に従って (Objekt-Beziehung) 屈折しているところも 4例観察される<sup>12</sup>。このことについて次の例文を見ることにしよう。

3) Joh *birun mornênte* in suâremo elilente,  
in githuingnisse; thes sîn uuir io giuuisse. (III. 26, 23f.)  
(我々は) 不幸にも必然的に異国在住を迫られて悲しい。このことを我々は常に心に留めておきたいものよ。)

4) Thi er hera in uuorolt sentit, thann er kraft uuirkit,  
joh uuerk filu hebîgu *ist* iru *kudentu*. (I. 4, 61f.)  
(彼 (=神) が驚異の御業を行うときに、彼ら (=使いの者達) をこの世に送り、非常に意味深い御業を世に告知する。)

例文 3) では、*mornênte* の語尾は主語 (前行で *wir* で現れる) に従って男性複数主格として屈折しているが、これは言うまでもなく文法的に正確な働きをしている。これに対して例文 4) の *kudentu* は目的語 *uuerk filu hebîgu* (=非常に意味深い御業) に従って中性複数対格で屈折しており、破格ともいうべき形を示している。エールトマンはこれらの箇所について、「彼 (=オットフリート) は、第 I 巻で *uuesan (sîn)+Part. Präs.* の形式をよく理解して頻繁に用いている。(この形式を) あまり知らなかったのは彼の書記のほうだったのではなからうか。思うに、V 写本<sup>13</sup> の最初の書記がこれらの箇所を、韻の都合のためにその手本を校正してしまっただけではないか、おそらく *habên+Part. Prät.* という結合のことを考慮に入れて、大方のところこの詩節でオットフリートの構想では、韻を踏ませなかったであろう<sup>14</sup>」と述べているが、真偽の判定は難しいところである。むしろこれは意味内容の面からみて、代名詞 1 語で簡単に表現された主語 *er* に対して、目的語である *uuerk filu hebîgu* を特に際立た

せようとした結果、形態的にもそれに牽引 (attrahieren) されたということと、韻の制約を受けているということが重複した結果生じた現象である、と言えるだろう。

ここで語順について少し触れておく。現在分詞の現れる環境は、以上のことから分かるように殆ど全てが半詩行 (Halbvers) の文末であるが、全く韻の制約を受けない例も 3 箇所で見られた<sup>15</sup>。

- 5) Thie thâr in restî frôno      gizâmun sô scôno,  
    *uuârun scinenti* fram,      sô gotes botôn uuola zam. (V. 8, 3f.)  
    (その墓のところに清くあったその人達 (=天使) は輝かしく似つ  
    かわしくあり、神の使者に全くふさわしくよく輝いていた。)

また従属文中において *uuesan(sîn)* と Part. Präs. の位置が逆転している箇所が 1 例のみ見られた。

- 6) *Uuanta* thu *abahônti*      *bist* gotes ârunti (I. 4, 67)  
    (汝は神の知らせを拒んでいるので)

この例文は、全体が接続詞 *uuanta*(=何故なら) に導かれた従属文という形をとっている。動詞 *uuesan(sîn)* の前に現在分詞が置かれているのは、この箇所だけである。

### 3. *uuesan(sîn)* + Part. Präs. の意味

現在分詞それ自体が元来能動の意味を持った形容詞的機能を果たしうることから推し測ることができるように、この構造は主に継続中の出来事や未完了の状態を表していた。しかしながら将来は消滅する運命にあったドイツ語の古い時代のその構造は、意味範疇では、さまざまな微妙なニュアンスの違いが認められ、それを完全に細分化し、体系化することは容易ではない。ここでは、ゲルマン語時代から広い範囲に渡って英語の現在進行形の歴史について研究したモッセ (Mossé) による用法上の分類<sup>16</sup> の助けを借りて、古高ドイツ語におけるこの構造の意味的特徴の一面を整理し

てゆくことにする。彼はそれを以下のように分類している。

## I. 客観的継続性

### 1. 不確定的継続性

§ 1 純粹に不確定的な継続性：現実性\*<sup>a</sup>

§ 2 永続性と特質

§ 3 叙述と観察\*<sup>b</sup>

### 2. 確定的継続性

§ 1 副詞とともに\*<sup>c</sup>

§ 2 接続詞のあとで\*<sup>d</sup>

§ 3 限定的継続性

§ 4 同時性

### 3. 頻度\*<sup>e</sup>

### 4. 起動相的価値

### 5. 終始相的価値

## II. 主観的継続性

### 1. 想像の世界\*<sup>f</sup>

§ 1 仮定と推測

§ 2 法性

§ 3 精神と感覚の作用

### 2. 強調

## III. 多彩な用法

ここにおいてはこれらの全てに立ち入って説明することはしない。もとと同じ西ゲルマン語の流れを汲む英語が、現代に至るまで現在進行形を生き生きと保持し続けてきて、それゆえその歴史の中でこのように、古高ドイツ語よりはるかに広い用法を得ることができたのは、自明のことであろう。しかしモッセ自身も言っているように、英語においてさえもその詳細な分類は難しく、これはあくまでも傾向でしかない。\*印を付けた項目について、今回の調査の意味的側面（用法）を見てゆく。（それ以外の項目は、古い時代における例文が稀なもの、つまり後世に入ってから生じた

用法と見做すことができるもの、そして勿論それ以前に、今回の調査の中にこれと合致するところを見出すことのなかったものである。）

なお「オットフリートの福音書」は、著者がルートヴィッヒ二世の委嘱を受け、民衆の言葉でキリストの生涯を描いた作品であるが、ラテン語版の聖書をもとにしていることは確かであり、随所に表現が一致するところが多く見受けられることは言うまでもない。そのように、表現がラテン語の聖書と酷似、あるいは合致しているところには、特に細心の注意を払って考察を進めたい。

(\*a, \*b) モッセはまず客観的継続性と主観的継続性とに大きく二分しているが、この作品では殆どの箇所が前者に属するものであった。「純粋に不確定な継続性：現実性」の項では、彼は、「現実性」という言い方に関して「話し手はただ自分が話す瞬間にある行為が展開していることを述べているにすぎない」と説明している。本作品中の「話し手」とは聖書における「語り手」と見做すことができる。この「現実性」という点ではしかし、これから挙げる例文に殆どが当てはまるので、ここでは「純粋に不確定な継続性」として取り扱うことにする。また、「叙述と観察」の項では、稀にしか見られない用法として新しい時代の例しか挙げていないが、これに当たるものと判断した例をも含めて、以下に挙げる。

- 7) Thoh ih thârzuâ hugge, thoh scouôn sio zi rugge,  
*bin mir menthenti in stade stantenti.* (V. 25, 99f.)  
(私がそれ (=これまでの苦しみ) を思い起こすことを考えるにしても、とにかく岸に辿り着いていることを喜んでいる<sup>17</sup>。)
- 8) sie *uuîrun uuartenti* uuara man nan legitî, (IV. 35, 24)  
(彼女たち (=マグダラのマリアとヨセフのマリア) は、人々が彼 (=イエス) をどこに置く (=埋める) かをじっと見つめていた。)
- 9) bî thiû *ist er selbo in nôti nu unsêr uuisônti;* (I. 10, 24)  
(...というのは彼 (=主) は御自ら今やまことに我々を求めているか

ら)

10) *Thō uuârūn thâr in lante hirtâ haltente*, (I. 12, 1)

(その頃その国では、羊飼いたちが羊の番をしていた。)

7) の例文では *uuesan(sîn)+Part. Präs.* を現在形で「喜んでいる」、8) の例文では過去形を用いて「じっと見つめる」という状態を比較的長い、そして不確定の継続として表していると言える。後者はラテン語では、*āspiciō* (=注視する) の未完了過去分詞 *āspiciēbant* (Marc. 15, 47) を用いて、同じく継続または存在を示している。本文中、動詞以外の品詞によって限定された事象を示していることもない。この形式がこのように不確定性を表していると思ふことができる箇所は多く見られ、それぞれの品詞の統語上の要素の本質からも分かるように、最も典型的な用法であると言える。さらに 9) の例文では、前述した「現実性」にもしスポットを当てるならば、「我々を求めている」という表現を *nu( >nhd. nun* 「今」) という副詞を加えて、より一層現実的継続性を強め、読者に強い印象を与えようとしているのではなからうか。つまりこの *nu* は、リズムのための埋め草的存在と捉えることもできるが、文の現実的内容をより豊かにするために、その両方の相互作用を巧みに利用していると理解してよいと思われる。

一方10) の例文では、主語は不特定の人々を表しており、言わばそういう事実があったということを話者とは無関係の事象として叙述していることがわかる。この用法はやはり稀にしか見られない。ここの箇所は興味深いことに、ラテン語では当該の形式と同じ *sum+Part. Präs.* の形をとっている。

*Et pāstōrēs erant in regiōne eādem vigilantēs et cūstōdientēs vigiliās noctis suprā gregem suum.* (Luk. 2, 8)

(夜にはその土地で羊飼いたちがその群れのところで眠らないで、また見張り番をしつつあった。)

ラテン文法ではしかしながら、泉井氏が述べているように<sup>18</sup>、一般的にはこの統語構造はないと見做されている。その両方の品詞は元来の機能を果たしており「～としてある、～しつつある」という意味で、性質・傾向・行状・状態を表すものとされている。ここで敢えて同氏の言葉を借りるならば、10) の例は「行状」を表しているところであり、形態的にも意味的にもラテン語の影響を強く受けているといえよう。

このように、両者の形式と意味が全く一致している箇所は、この他に次のとおりである。[I. 4, 6ff. 11)の例文], I. 4, 16f.; I. 4, 77] また少なからず影響を受けたであろう箇所として、sum 以外の一般の動詞と共に現在分詞が用いられているものも見られた<sup>19</sup>。[I. 4, 22; I. 22, 51; III. 4, 10]

古高ドイツ語における *uuesan*(*sîn*)+Part. Präs. の構造の原拠が、「もともとゲルマン語本来のものであるか、ラテン語の影響によって生じているのかは、問題なのであり、」<sup>20</sup> 判断の非常に困難なところである。当時の翻訳的散文作品(=イシドール、タツィアーン)を題材に扱い、細部に渡って丹念に翻訳状況を調べ上げたカウフマン (Kaufmann)<sup>21</sup> でさえも、その形態的傾向を辿るにとどまっている。

(\*c, \*d) 次に確定的継続性の中で、「副詞とともに」の項では「極めて長い期間を表す、時を示す副詞によって明示される」とあり、また「接続詞の後で」の項では「while, as, when のような継続性を示す接続詞的表現のあとで」と分類しており、これらの用法は英語の最も古い用法のうちの一つであると説明を加えている。

- 11) *Uuârun* *siu bêdiu*      *gote filu drûdiu*  
*ioh iogiuuâr sînaz*      *gibot fullentaz,*  
*Uuizzôd sînan*      *io uuirkendan* (I. 4, 5ff.)

(彼ら二人(=ザカリヤとエリザベート)は神にとって非常に愛しいものであり、至る所で神の命令を満たしていて、常に神の掟を果たしていて...)

- 12) *er uuas thionônti thâr*      *gote filu manag jâr.* (I. 15, 2)

(彼(=至福の定めを受けた老人)は、非常に長い歳月に渡って神に仕えていた。)

13) Unz ih bin hiar in uuorolti, sô bin ih licht beranti  
zi frônisgên thingon allên mennisgôn.“ (III. 20, 21f.)

(私がこの世にいる限り、私は気高い行いをするためにあらゆる人間に対して光を生むのである。)

11) の例文では「神の掟を果たす」という事象を io(=常に) という副詞を用いてその長く続く継続性を強調しているといえる。しかしながら、それはしばしば、過去における習慣としても捉えることができ、次の項で挙げる「頻度」との区分は難しい。むしろ12) の例文に見られるような副詞句 filu manag jâr(=非常に長い歳月に渡って) を用いて、具体的にかなり長く続く状態を明示している例の方が分かりやすい。fon anagenge uuorolti(=この世の始まりから—I. 7, 11), allo uuorolti(=いつの時代も—I. 7, 21; I 7, 26) 等、具体的な副詞句が多く見られた。またこの io, iamêr などかなり長い継続を示す副詞は、とくに願望文において好んで用いられているようである。[II. 24, 46; IV. 37, 39(16)の例文), V. 25, 94等] それらの例も確定的継続性ということができようであろう。13) の例文では、従属接続詞 unz(=～である限り) で導かれる限定的条件文によって「光を生む」という事象の継続性が確定されている。ラテン語では、この箇所前半の従属文は全く同じ構造をとっており、後半の主文は「私は光である」という非常に強い断定文である。限定条件付きの強い継続を表現しているといえる。著者オットフリードは、説明的な表現を用いることによって、意味をより容易に理解させようとしたのであろうか。Quandiū in mundō sum, lux sum mundi.(Joh. 9, 5) (私がこの世にいる限り、私は世の光である)

なお例文11), 12) に見られるように、この作品では数多くの固有名詞が伏せられている。ここでラテン語版聖書の次の箇所を挙げることにする。

Āscendit autem et Ioseph ā Galilaeā dē civitatē Nazareth in

*Iūdaeam* in civitatē *David*, quae vocātur *Bethlehem*: eō quod essetdē domō et familia *David*, ut profiteretur cum *Mariā* dēspōnsātā suā uxōre praegnānte. (Luk. 2, 4f.)

(そしてヨセフはガリレアの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムと呼ばれるダヴィデの町へと上っていった。というのは彼はダヴィデの家系で、その血筋でもあったからであり、身籠っていて彼の許嫁である妻マリアと一緒に申告をするためであった。)

この箇所を著者オットフリートは次のように描いている。

*Ein burg* ist thâr in *lante*, thâr uuârun io ginante  
hûs inti uuenti zi *edilingo* henti.  
Bî thi uuard thih nu sagêta, thaz *iosêph* sih irburita;  
zi theru steti fuart er *thia druhtines muater*;  
Uuanta *ira anon* uuârun thanana, gotes drûtheganâ,  
fordoron alte zi sâlidôn gizalte. (I. 11, 23ff.)

(その国には、ある町がある。そこでは、全てのものがある高貴なお方の手中にあると常々言われていた。というわけで私が今申し上げたことが、つまりヨセフが上っていったということが、起こった。彼は主の母をその町に連れていった。なぜなら神の僕であり、古い祖先、また至福へと定められたお方である、彼女の先祖がそこにいたからである。)

ラテン語の方では、このように短い叙述のなかで実に8語もの固有名詞が使われている所であるが、「オットフリート」では殆どが避けられており、ただ「ヨセフ」のみが実名で挙げられている。先に触れたように著者オットフリートは、多くのフランク人に分かり易く母国語でキリスト教を伝えることを、第一の目的としていた。この箇所では特に、彼らの間でそれまで馴染みのなかった異国の宗教であること、そして神聖なものに対する畏怖の念から、一語一語丁寧に気を遣い、このような非常に遠回しの表現をとったといえる。ゲルマン人のタブー信仰がよく現れているところであると言えるであろう。

(\*e) モッセの指摘している「頻度」とは、「反復」のことである。彼は「一連の事実の反復を、継続性に相応するもの」として認識している。

14) Bi enterin uuorolti      *uuas er liut beranti*; (I. 3, 7)

(この世の始めに彼(=アダム)は人々を儲けた。)

15) Sôs er thuruh alle      thie forasagon sîne

theru gôregûn uuorolti      *uuas io giheizenti*. (I. 10, 7f.)

(彼(=主)があらゆる予言者たちを通して貧しき民にいつも約束してきたように...)

これらの例文ではそれぞれ「儲ける」(=*beran*)、「約束する」(=*giheizan*)という事象が繰り返し反復されていることが、文の前後関係から読み取れる。つまり事象と事象とがいわば点的に繰り返し連続して行われることによって、線的な継続を生んでいるのである。「繰り返し、何度も」という表現を付け加えればより分かりやすく、このようなニュアンスが大いに含まれているといえよう。ところでここで使用されている動詞自体に目を向けてみると、両方の例文中における動詞は、動作様態(=*Aktionsart*)で言うところの完了相の性質を持った動詞であることが分かる。そもそも「反復」していることを表現する場合には、「継続中の、あるいはまだ終了していない」事象、つまり「未完的」事象よりも、「ある行為が終了した、あるいはこれから始まる」といった事象、つまり「完了的」事象を表す動詞を用いることが多いということは、当然のことであるかもしれない。そのような反復を表している箇所を以下に挙げておく。[I. 3, 7; I. 7, 21; I. 7, 22; III. 20, 21 (これは \*c, \*d の所で既に挙げた例文であるが、敢えて説明をするならば、「確定的な反復」とでも言えようか。)]

ところが本調査中、この *uuesan* (*sîn*) +Part. Präs. の形式をとって、このような完了相の性質を持った動詞が、完了の意味を崩さずに用いられている箇所が少なからず見られた。

ここで、今触れた動作相について少しばかり説明を加えておく。動作相という術語は元来、時制の概念を論議することに始まった。もともと時制

を表す語幹が造られたとき、時間の段階を表現するものではなかったはずである。というのはドイツ語では実際、例えば、過去の事象を表現する場合に過去形・現在完了形・過去完了形を用いることが可能であるし、またこれとは反対に現在形を使って現在・過去・未来、更に無時制の事象を表現できる。このような矛盾から「いつ」ではなく「如何にして」という観点から、動詞の事象そのものにスポットを当て、つまり動詞行為の進行の仕方によって動詞形態を捉えようとするものである<sup>22</sup>。大きく分けて、「完了相」(perfektiv, punktuell)と「未完了相」(imperfekt, durativ)とに区分される。なるほどシュミット(Schmidt)がアドモーニ(Admoni)の言葉を引用している<sup>23</sup>ように、「ドイツ語には、ロシア語のように事象の経過を考慮にいたった二つの大きなカテゴリーに全動詞を区分するという、形態的特徴を持った体系は存在しない。英語において造られているように、事象経過の観点から特定化された時制形態もまたドイツ語にはない」とはいうものの、この件に関しては多くの研究者達の間で論議されるところであり、ドイツ語では実際大部分の動詞が、その語彙的手段・文法的手段によってこの動作相を区分することができるのである。

つまり本調査において、完了相的下位区分のうちの期限的(=terminativ)な動作を表す動詞が、uuesan(sîn) + Part. Präs. の形式をとっているにもかかわらず、「反復」ではなく本来の「完了」を表している例が少なくなかったのである。期限的な動詞とは、「ある一定の開始を想像し、それと同時にある終了を提示している」時間とは懸け離れた動詞のことである<sup>24</sup>。

- 16) Sprâchun thô thie liuti      joh uuârun frâgênti,  
 uuaz zeichono er in ougtî      ingegin thera dâti. (II. 11, 31f.)  
 ((ユダヤの)人々はそのとき話をして、彼(=イエス)が自分たち  
 にかの行いに対して如何なるしるしを示すのかを問うた。)

- 17) Thes opheres zîti      uuârun entônti, (I. 4, 81)  
 (供物の時間が終わった。)

16), 17) の例文では「問う」・「終える」という事象が過去形をとって、過去におけるただ一回の出来事として表示されており、「反復」を表しているのではない。言い換えるならば、「問う」・「終える」という点的な事象は始まると同時に終了しているのである。ラテン語では、それぞれ *dixērunt* (<*dīcō* 「言う、述べる」: Joh. 2, 18), *impletī sunt* (<*impleō* 「満たす」: Luk. 1, 23) と完了形をとっている<sup>25</sup>。このように *uuesan* (*sīn*) + Part. Präs. の形式をとりながら、なんら継続や反復を示してはいない箇所は、以下のとおりである。[I. 4, 29; I. 4, 58; I. 4, 68(後半部); I. 4, 77; I. 5, 31; I. 5, 62; I. 9, 30; I. 9, 31(後半部), I. 10, 21; I. 17, 13; I. 17, 34; I. 23, 53(2) の例文), II. 11, 31; III. 15, 38] これらの中に見るように、特に過去形で表現されているところでは「言う」・「問う、尋ねる」といった語が多く見られた。しかしながら、ラテン語のこれらの箇所では「未完了過去」で表現されているものも多少あり、判断の困難なところである<sup>26</sup>。物語中の各々の場面における視点の置き方によるものなのであろうか。

(\*f) 「主観的継続性」における「想像の世界」としては、ここでは仮定・推測・願望・祈り・要求といった主観的な継続を表すものを、まとめて取り扱うことにする。作品の性格上、接続法を用いて願望や祈りを表す例が多く見られた。

18) *In thiū sīn furdīr uuonēnti joh druhtīn iomēr lobōnti,*  
(IV. 37, 39)  
(ここ(=この世)に(我々が)いつまでも留まることができ、主をいつも褒めたたえられますように。)

19) *Ih uuānt ih scoltī nōti sīn iamēr mornēnti*  
*blintilingon hōno; nu sihuh auur scōno.* (III. 20, 115f.)  
(私は盲目であり、軽蔑されてずっと悲しみ続けるであろうと思っていた。がしかし、今や素晴らしくも目が見えるのだ。)

18) の例文は 接続法を用いて、作者の祈りの気持ちを率直に表現しているといえる。「確定的継続性」の項で触れたように、ここにおいても *furdir*(=いつまでも)、*iomêr*(=いつも) という長い継続を表す副詞句が付加され、限定つきの主観的用法といえよう。19) の例文では、*scolti* (<*scal*, *nhd.* *sollen*) という助動詞の助けを借りて、話者の心の内を強く打ち出している。ところでこの *scolti* がそれ自体で、話法性を持っているか否かの判断は困難なところではあるが、この箇所では、いずれにせよ *uuesan*(*sîn*) + *Part. Präs.* との相互作用で、未来的な意味内容を含ませているところであると見做したい。つまり筆者は、本稿で扱っている形式が、更に時制論でいうところの「未来」をも表しうるということを付け加えておきたい。

20) *Er ist thir herzblîdi, ouh uuirdit filu mâri;*  
*ist sînêru giburti sih uuorolt mendenti.*  
*Guatî so ist er hôhêr joh gote filu liubêr;*  
*ist er ouh fon jugendi filu fastênti.* (I. 4, 31ff.)

(彼(=ヨハネ)は汝(=ザカリア)にとって心から喜ばしく、非常に有名になろう。そして彼の誕生によって世界が喜ぶであろう。その卓越さゆえに彼は高くあり、神にとって非常に愛しいものになるであろう。また若いころからよく断食するであろう。)

この場面では、これから生まれるヨハネについての予言的な叙述がなされている。従って内容的には全て未来的な表現であるといえる。ところが *mendên*(=喜ぶ) も *fastên*(=断食する) も当該の形式を用いている一方で、それ以外の文は動詞の単純な現在形を用いている。もともとゲルマン語においては時制を表す場合、現在形と過去形以外に特別な手段をとることができず、未来の事象を表現する場合にも現在形で事足りていたことはよく知られるところである。古高ドイツ語におけるそのような事情から、ラテン語原典が総合的表現で未来時制を明示している場合、その箇所をいかに表現しようか苦心したことであろう。とはいうものの結局は当該の形式も、現在形をとっている時点で既に未来時制をも表現しうるといえるこ

とから、この箇所では単なる書き換えである可能性が高いかもしれない。因みにラテン語では *gaudēbunt* (<*gaudeō* 「喜ぶ」: Luk. 1, 14) という未来時制をとっている。なお、この他に未来的表現をなしている所をエールトマンの記述に従って記し<sup>27</sup>、中でもラテン語で未来形が用いられている箇所の実例を挙げておく。 [I. 4, 38; I. 5, 31; I. 10, 18]

- 21) *Allêra uuorolti ist er lîb gebenti,*  
*thaz er ouh insperre himilrîchi manne.*“ (I. 5, 31f.)  
(天国を人々に開かんがために、彼(=イエス)は全ての人々に永遠の生を与えるであろう。)

*ipse enim salvum faciet populum suum ā peccātis eōrum.*  
(Matt. 1, 21)  
(なぜならその人(=イエス)は御自身の人民を彼らの罪から救うであろうから。)

#### 4. 結びに代えて

以上 *uuesan(sin)* + Past. Präs. の用法を概観してきたが、本稿を終えるに当たって二つの点について再考しておきたい。

先ず10)の例文と、これに対応するラテン語の聖書の箇所をもう一度挙げておこう。

- 10) *Thô uuârûn thâr in lante hirtâ haltente,* (I. 12, 1)  
(その頃その国では、羊飼いたちが羊の番をしていた。)

*Et pāstōrēs erant in regiōne eādem vigilantēs et cūstōdientēs*  
*vigiliās noctis suprā gregem suum.* (Luk. 2, 8)  
(夜にはその土地で羊飼いたちがその群れのところで眠らないで、また見張り番をしつつあった。)

この箇所の古高ドイツ語とラテン語の形式上的一致については、既に触

れた。これに対してウルフィラによるゴート語聖書でも、ギリシャ語聖書から当該の形式を踏襲しているのである。

jah hairdjos *wesun* in þamma samin landa, þairhwakandans  
jah *witandans* wahtwom nahts ufaro hairdai seinai.

*καὶ ποιμένες ἦσαν ἐν τῇ χώρᾳ τῇ αὐτῇ ἀγραυλοῦντες καὶ φυλάσσοντες  
φουλακὰς τῆς νυκτὸς ἐπὶ τὴν ποίμνην αὐτῶν.*

ここにおいて、ウルフィラによってギリシャ語原典から直接翻訳されたといわれる聖書のゴート語と、ラテン語聖書からの影響を強く受けている「オットフリート」の古高ドイツ語とが、つまり東ゲルマン語と西ゲルマン語がそれぞれ異なった外部の言語から、この構造を受け継ぎ、結果的に両者の形式が一致するに至ったことを確認することができるのである。本調査中、前述の4例全てに同じ形式の一致が見られる [I. 4, 6ff.; I. 4, 16 f.; I. 4, 77]。更に付け加えるならば、この第I巻第12章ではゲルマン語固有の頭韻が多用され (5, 7, 20行他)、また新しく取り入れた脚韻が崩れているところが (3, 8, 21行他) 少なくなく、文の未熟さが見られるところである。つまりこの章は、先に触れたように「オットフリートの福音書」の執筆開始後間もなく書かれた部分であって、当該の形式についてもいわばラテン語の語法を試していると考えられ、ゲルマン語には馴染みのなかった形式を踏襲するしかなかったのではなからうか。

もう一点、用法に関して、現在分詞に特に完了相の性質を持った動詞が適用され、その意味を崩すことなく用いられることがあったことを確認しておきたい。つまり *uuesan* (sîn) という存在動詞が、反復を含めた継続性をなんら示すことなく、点的・完了的事象の概念をもつ現在分詞と結合すること自体、不自然な現象なのであり、正確な機能を果たしているとは言い難い。このことは、この存在動詞はもはや存在・状態・継続を示す役割をなさず、コプラ(連辞)としての弱化された機能しか果たしていないことを示しているといえるのではなからうか。言い換えるならばオットフリートは、*uuesan* (sîn) を助動詞的な存在として、現在分詞で現れる

動詞の補助的な役割として用い、エールトマンが言うように、迂言的表現としてこの形式を認識していたと思われる。

今後の課題として、韻の制約を受けない散文作品を題材として、更に広い範囲で研究を進めて行きたい。

本調査の締めくくりとして、uuesan(sín) + Part. iPräs. の筆者なりに整理した意味分類を取って付しておく。\*印のところは、二様の解釈が可能な箇所である。

(1) 客観的継続性

- 不確定的継続性（純粋に不確定な継続性：現実性）—40例

I. 1, 112; I. 3, 32; I. 3, 40; I. 4, 6; I. 4, 16; I. 4, 17; I. 4, 22; I. 4, 40; I. 4, 65; I. 4, 67; I. 4, 68; (前半部), I. 4, 83(2例); I. 4, 85(2例), I. 5, 20; I. 5, 59; I. 7, 2; I. 7, 7; I. 9, 4; I. 9, 10; I. 9, 24; I. 9, 31(前半部); I. 9, 36; I. 9, 40; I. 10, 10; I. 10, 24; I. 12, 12; I. 17, 58; I. 18, 21; I. 22, 51; I. 27, 2. III. 4, 10; III. 7, 15(2例); III. 14, 61; III. 26, 23. IV. 9, 26; IV. 35, 24. V. 8, 4; V. 25, 100. H 85

- 叙述と観察—1例

I. 12, 1

- 確定的継続性（副詞とともに、或いは接続詞のあとで）—20例

L 66. I. 4, 7; I. 4, 8; I. 4, 10; I. 4, 60; I. 5, 60; I. 7, 11; I. 7, 21\*; I. 7, 22\*; I. 7, 26; I. 10, 8\*; I. 10, 18\*; I. 11, 4; I. 11, 32; I. 15, 2. II. 1, 5; II. 24, 46\*. III. 20, 21\*. IV. 37, 39\*. V. 24, 22\*

- 頻度—5例

I. 3, 7; I. 7, 21\*; I. 7, 22\*; I. 10, 8\*. III. 20, 21\*

(2) 主観的継続性（想像の世界）—14例

I. 2, 5; I. 5, 62\*; I. 5, 66; I. 10, 16; I. 11, 18; I. 23, 53\*. II. 24, 46\*. III. 20, 115. IV. 13, 43; IV. 37, 39\*. V. 15, 41; V. 19, 35; V. 24, 22\*; V. 25, 94

(3) 未来的表現に近いもの—7例

I. 4, 29\*; I. 4, 32; I. 4, 34; I. 4, 38; I. 5, 31\*; I. 9, 12; I. 10, 18\*

(4) 完了的表現に近いもの—15例

I. 4, 29\*; I. 4, 58; I. 4, 68; (後半部), I. 4, 77; I. 4, 81; I. 5, 31\*;  
I. 5, 62; I. 9, 30; I. 9, 31; (後半部), I. 10, 21; I. 17, 13; I. 17, 34;  
I. 23, 53\*. II. 11, 31. III. 15, 38

(5) 判断の困難なもの—4例

I. 4, 62; I. 4, 74; I. 5, 48; I. 23, 44

テ ク ス ト

Erdmann, Oskar(hrsg.): Otrfrids Evangelienbuch. Tübingen, 6. Aufl., 1973.  
Piper, Paul(hrsg.): Otrfrids Evangelienbuch. Hildesheim/New York, Nachdruck der Ausgaben Freiburg u. Tübingen 1882 u. 1884, 1982.  
Nestle-Aland (hrsg.): Novum Testamentum Latine. Stuttgart, 2. Aufl. 1992.

注

- 1 Sein と結合しやすい現在分詞の一部を挙げておく。abwesend, ausfallend, bedeutend, empörend, entscheidend, rührend, umfassend, verlockend, zwingend usw.
- 2 Paul, Hermann: Deutsche Grammatik IV. Tübingen, unveränderter Nachdruck der 1. Aufl. von 1920, 1968. S. 68.
- 3 Behaghel, Otto: Deutsche Syntax Bd. 2. Heidelberg, 2., unveränderte Aufl., 1989. S. 372~396. なお、ここではもう一つ「不定詞から造られる現在分詞」という項目を設けているが、それはラテン語の *gerundivum* に由来するものであり、現代ドイツ語の未来分詞についての説明なので、ここでは省いた。
- 4 Erdmann, Oskar: Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otrfrids 2 Teile in 1 Band. Hildesheim/New York, 1973. Erster Teil. S. 215~220.
- 5 この un- という接頭辞が付加された時点で、形態的に形容詞的であるとはいえない。Behaghel, a. a. O., S. 393.
- 6 本来ならばこれは、意味の上からも「部分の属格」(ここでは複数で)をとらなければならないところであるが、ここでは、ein も thîn gisibba も主格の形をとっている。押韻のためであると思われる。
- 7 Erdmann, a. a. O., S. 217.
- 8 Kelle, Johann: Glossar der Sprache Otrfrids. Aalen, Neudruck der Ausgabe 1881, 1963. S 639.

Piper, Paul: Otfriids Evangelienbuch. II. Theil. Glossar und Abriss der Grammatik. Freiburg, 1887. S. 541.

- 9 順に(タイトル): Ludovvico orientālium rēgnōrum rēgī sit salūs aeterna; Dignitātis culmine grātia dīvina praecelsō Liutbertō Mogontiācensis urbis archiepiscopō Otfriidus quamvis indignus tamen dēvōtiōne monachus presbyterque exiguus aeternae vitae gaudium optāt semper in Christō; Salomoni episcopō Otfriidus; Otfriidus uuizanburgensis monachus Hartmuate et Uerinbertō sancti galli monastērii monachis.
- 10 L. 66. I. 1, 112; I. 2, 5; I. 3, 7; I. 3, 32; I. 3, 40; I. 4, 6; I. 4, 7; I. 4, 8; I. 4, 10; I. 4, 16; I. 4, 17; I. 4, 22; I. 4, 29; I. 4, 32; I. 4, 34; I. 4, 38; I. 4, 40; I. 4, 58; I. 4, 60; I. 4, 62; I. 4, 65; I. 4, 67; I. 4, 68(2例); I. 4, 74; I. 4, 77(2例); I. 4, 81; I. 4, 83(2例); I. 4, 85(2例); I. 5, 20; I. 5, 31; I. 5, 48; I. 5, 59; I. 5, 60; I. 5, 62; I. 5, 66; I. 7, 2; I. 7, 7; I. 7, 11; I. 7, 21; I. 7, 22; I. 7, 26; I. 9, 4; I. 9, 10; I. 9, 12; I. 9, 24; I. 9, 30; I. 9, 31(2例); I. 9, 36; I. 9, 40; I. 10, 8; I. 10, 10; I. 10, 16; I. 10, 18; I. 10, 21; I. 10, 24; I. 11, 4; I. 11, 18; I. 11, 32; I. 12, 1; I. 12, 12; I. 15, 2; I. 17, 13; I. 17, 34; I. 17, 58; I. 18, 21; I. 22, 51; I. 23, 44; I. 23, 53; I. 27, 2. II. 1, 5; II. 11, 31; II. 24, 46. III. 4, 10; III. 7, 15(2例); III. 14, 61; III. 15, 38; III. 20, 21; III. 20, 115; III. 26, 23. IV. 9, 26; IV. 13, 43; IV. 35, 24; IV. 37, 39(2例). V. 8, 4; V. 15, 41; V. 19, 35; V. 24, 22; V. 25, 94; V. 25, 100. H. 85.
- 11 I. 2, 5; I. 4, 6; I. 4, 7; I. 4, 29; I. 4, 62; I. 5, 59; I. 12, 1; I. 18, 21. III. 14, 61; III. 26, 23. IV. 9, 26. H. 85.
- 12 例文4)の他に, I. 2, 5; I. 4, 6; I. 4, 7.
- 13 この作品の写本は, V, P, D, F の4種類が見つかっており, その中でV写本(Codex Vindobonensis)が, 最も信頼のおけるものとされている。一般にWiener Handschriftと呼ばれ, 現在ウィーンのオーストリア国立図書館に保管されている。
- 14 Erdmann, Oskar: Otfriids Evangelienbuch. Halle, 1882. S. 344.
- 15 例文5)の他に, I. 1, 112; I. 15, 2.
- 16 Mossé, Fernand: Histoire de la forme périphrastique être + participe présent en germanique. Paris, 1938. 高橋博訳『ゲルマン語・英語迂言形の歴史』青山社 1993年, 179~250ページ。

- 17 因みにユートマンは7)の例文の前半部の動詞 *scouuôn* を不定詞と考え、これを *tharzua* で受け、*hugge* の目的語と理解しているが、一方で *scouuôn* を現在形と捉え、認容を表す *thoh* 節の帰結文として理解することもできる。「私がそのこと(=この仕事を終えること)を考えるにしても、それ(=これまでの苦しみ)を思い起こし、とにかく岸に辿り着いていることを喜んでいる。」
- 18 泉井久之助『ラテン廣文典』白水社 1955年、250~251ページ。
- 19 例えば、III 4 10; *thes uuârun fârênti thaz sih thaz uuazar ruarti.* ((痛風を患った人々は)その水が動きだすのを待っていた。) Joh. 5 3; In his *iacēbat* multitudō magna languentium,.....*expectantium* aquae mōtum. (そこには、病んでいる人々の多くが水の動きを期待しつつ横たわっていた。)
- 20 Dal, Ingerid: Kurze deutsche Syntax. Tübingen, 3., verbesserte Aufl., 1966. S. 115.
- 21 Kaufmann, Paulus: Über Genera Verbi im Althochdeutschen besonders bei Isidor und Tatian. Inaugral-Dissertation. Erlangen, 1911.
- 22 Krahe, Hans: Grundzüge der vergleichenden Syntax der indogermanischen Sprachen. Innsbruck, 1972. S. 117.
- 23 Schmidt, Wilhelm: Grundfragen der deutschen Grammatik. Berlin, 4., verbesserte Aufl., 1973. S. 213.
- 24 a. a. O., S. 214.
- 25 17)の例文について、エールトマンはラテン語の過去完了に合致すると述べているが、誤りである。Erdmann, Untersuchungen, S. 218.
- 26 例えば、I 17 34: *sie uuas er frâgênti*, uuâr Krist giboran uuurti. (彼(=ヘロデ王)は、どこでキリストがお生まれになったかを問いただした。) Matt. 2 4: *sciscitâbatur* ab eis ubi Christus nâsceretur. ((ヘロデ王が)何処でキリストが生まれるのかを彼ら(=博士たち)から知ろうとした。)この箇所は、内容的に完了形がとられるはずのところであるが、ラテン語では未完了過去である。
- 27 Erdmann: Untersuchungen, S. 217.

# Der Gebrauch von „uesan(sîn) + Partizip Präsens“ im Althochdeutschen

— anhand des „Otfrids Evangelienbuch“ —

Tetta KANEKO

Im heutigen Deutsch kann das Part. Präs. gewisser Verben oft in Verbindung mit „sein“ erscheinen: z. B. „Die Sache ist dringend.“ Aber diese Erscheinung bezeichnet keine grammatisch besondere Struktur, wie „present progressive“ im Englischen. Im Hinweis auf das untersuchte Material dieser Arbeit („Otfrids Evangelienbuch“) können wir eine ähnliche Erscheinung finden. Das Part. Präs. spielte im prädikativen Gebrauch eine viel größere Rolle als heute: „uesan(sîn) + Part. Präs.“ Die Form war eine verbale Struktur in der Grammatik. Jedoch auf der anderen Seite kann man das Part. Präs. als appositionellen Nominativ ansehen, so „als ~, wie ~ sein“ unter der betreffenden Form verstehen; in diesem Fall erfüllt das Part. Präs. substantivische Funktion (Prädikat). Es ist oft schwer zu unterscheiden, ob die jeweilige Struktur verbal oder nominal ist.

In der Formenlehre müssen wir darauf achten, daß sich das Part. Präs. meistens am Ende des Halbverses findet: d. h. vielleicht kann diese Form aus reimtechnischen Gründen nur zu einer Umschreibung gebraucht werden. (Aber in einigen Fällen erscheint das Part. unabhängig von der Einwirkung des Reimbedürfnisses.) Ab und zu entspricht die Form ganz oder teilweise der lateinischen Bibel.

Insgesamt 98 Beispiele finden sich in diesem Werk, darunter 74 Beispiele im ersten Band. Im allgemeinen flektiert das Part. nicht,

während es nur in 12 Beispielen flektiert. In diesem Fall flektiert es in 8 Fällen nach dem Subjekt (=Subjekt-Beziehung)— das ist grammatisch recht — doch nur in wenigen Fällen nach dem Objekt des Part. (=Objekt-Beziehung).

Was die Bedeutung betrifft, bezeichnen fast alle Beispiele wegen der Natur des existierenden „uuesan(sîn)“ Kontinuität. In dieser Untersuchung unterscheiden wir die Form zum großen Teil semantisch der Klassifikation Mossés gemäß.

- |                            |   |   |
|----------------------------|---|---|
| i) objektive Kontinuität   | — | <ul style="list-style-type: none"> <li>— a) bestimmte Kontinuität</li> <li>— b) unbestimmte Kontinuität</li> <li>— c) Wiederholung</li> </ul> |
| ii) subjektive Kontinuität |   |   |

In i)-a), i)-b) können wir dadurch festsetzen, ob ein beschränkendes Element erscheint oder nicht, ob die Kontinuität bestimmt oder unbestimmt ist: z. B. durch Zeitdauer darstellende adverbiale Bestimmungen oder beschränkende Bedingungssätze.

Bei der Wiederholung (i)-c) wird bestätigt, daß mehrere *terminative* Verben nicht die Wiederholung ausdrücken, sondern den punktuellen Vorgang als solchen. Man könnte sagen, solches „uuesan(sîn)“ stelle nicht mehr Kontinuität, Existenz oder Zustand der Verbalhandlung dar, sondern habe als *Kopula* nur geschwächte Funktion: Otfrid halte das Verb für etwas Hilfsverbales, also erkenne die betreffende Form, wie Erdmann sagt, als periphrastisch.

In der subjektiven Kontinuität (ii)) gibt es wegen der Eigenschaft dieses Werkes nicht selten Ausdrücke des Gebets und des Wunsches. Daraus, daß die Subjektivität ausgedrückt werden kann, kann die Form auch Futur darstellen. Aber es könnte auch nur eine Umschreibung sein, da im Ahd. durch das Präsens die Zukunft angegeben wird.